



Title	大阪方言における授受表現：「テヤル」に由来する「タル」について
Author(s)	河野, 千尋
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2024, 20, p. 69-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100651
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪方言における授受表現

—「テヤル」に由来する「タル」について—

河野 千尋

【要旨】

本稿では、授受補助動詞構文の一つである「てやる」の大阪方言における形式「タル」について、大阪方言に特有の意味用法と待遇の意味を、内省をもとに記述した。「タル」は基本的には恩恵性の遠心的授与を意味するが、例外的に話し手に向かう求心的方向にも使用することができる。また、標準語「てやる」は「てあげる」の下向き待遇とされているが、大阪方言では恩恵の与え手と受け手が親しい関係であれば「ぞんざい」や「上から目線」のようなニュアンスを感じさせずニュートラルに用いることができることを述べた。さらに、「タル」には「マイナスの影響」や「評価・実行」といった意味が拡張した用法も存在するが、大阪方言としての「テアゲル」にこれらの用法がない。このことから、従来謙譲語として用いられていた「テアゲル」に比べて、もともとニュートラルな形式だった「タル」の方が意味の拡張を起こし、また文法化も比較的進んでいることを指摘した。

【キーワード】大阪方言、「タル」、補助動詞構文、恩恵の方向、意味の拡張

1. はじめに

「やる／あげる」「くれる」「もらう」のようにものの受け渡しを表す動詞を授受動詞といい、これらの動詞は他の動詞のテ形に付いて「てやる」「てもらう」といった形で動作の恩恵性を表す補助動詞構文を取ることができる。大阪方言における授受補助動詞構文の一つである「テヤル」は、筆者の内省¹⁾では縮約形「タル」という形で使われることが多い。標準語においては「てやる」は「てあげる」の下向き待遇と位置付けられるが、大阪方言の「タル」は上下関係よりも親疎関係に基づいて使用可否が決まるものであり、そのため標準語ほど「高圧的」や「ぞんざい」といったニュアンスは強くないと思われる（例文（1））²⁾。

（1）〔親しい友人に向かって〕教科書忘れたんやったら貸しタルで。

また、授受動詞について全国的な調査を行った日高（2007:19）では、「話し手から離れていく『動き』を遠心的方向、話し手に近づいてくる『動き』を求心的方向」と捉え、「やる」については遠心的方向の授与は表せるが、求心的方向の授与は表せないとしている。しかし、

-
- 1) 筆者は2000年生まれの現在22歳で、0歳から現在まで大阪府大阪市在住である。
 - 2) 本稿で用いる例文は、出典を明記していないものは全て筆者による作例であり、「*」は非文、「#」は待遇的に不適切、「?」は不自然な文を表す。適宜、例文末尾に（ ）書きで標準語訳を付す。発話場面の状況など、補足情報は[]に入れて示す。また、例文の表記については、議論の対象となる方言形式の授受表現形式には「タル」「テアゲル」のようにカタカナ表記を用い、標準語の文では「てやる」「てあげる」のようにひらがな表記にしている。ただし先行研究に言及するときは、先行研究の表記に倣うものとする。

大阪方言においては補助動詞構文に限り、「(聞き手が話し手に)～タル」のような求心的授与の用法も存在する(例文(2))。

(2) [私を] 許しタッてーや。

さらに、派生的な用法として、恩恵の逆の意味の非恩恵性を表す「マイナスの影響」の用法と、事態に対する(マイナスの)評価をしたうえでその事態を実現させるという「評価・実行」の用法も存在する。

(3) 意地悪したらあかんねんでー。先生に言っタロー。 【マイナスの影響】

(4) 絶対に今日中にレポート終わらせタル。 【評価・実行】

ただし、話し相手や「タル」が表す恩恵の受け手と話し手との親疎関係などによっては、待遇的に使用が不適切に感じられる条件も存在する。

(5) [電車で、知らない人に向かって] #お席代わったりしましょうか? 【受け手:疎】

このように、大阪方言における「タル」は形態的に対応する標準語の「てやる」とは別に独自の意味用法や待遇的条件を持っていると考えられる。本稿では筆者の内省をもとに、大阪方言における「タル」の意味用法および待遇的条件について述べる。「マイナスの影響」の用法や、「評価・実行」の用法は、遠心的授与の意味を中心として派生したものだと考えられるため、意味の派生関係についても考察する。また、同じ遠心的授与の意味を持ち、近年美化語として使用範囲を広げている「(テ)アゲル」と比較し、「タル」と「テアゲル」がどのような意味的領域に分布しているか考察する。

2節では、授受表現や大阪方言における待遇表現などについての先行研究をまとめたうえで、問題のありかを述べる。3節では「タル」の基本的な情報として、形態統語的な特徴について述べる。4節では「タル」の意味について、恩恵性の授受の方向別に大きく3種類の意味用法があることを述べる。5節では大阪方言において「タル」が待遇的に使用できる条件について整理する。6節では、大阪方言における「テアゲル」や標準語「てやる」と「タル」の違いについて考察するとともに、意味の抽象化・拡張についても考察する。最後に7節で全体のまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究と問題のありか

本節では、2.1節で日本語における授受表現についての先行研究、2.2節で方言形式「タル」についての先行研究、2.3節で大阪方言における待遇表現についての先行研究、2.4節では日本語における文法化についての先行研究をそれぞれまとめる。最後に2.5節で問題のありかを述べる。

2.1. 日本語の授受表現について

まず、大阪方言に限定せず日本語における授受表現についての先行研究をまとめる。

日本語における授受動詞には、人称や動作の方向性による使い分けがある。寺村(1982)で下の図1にまとめられている。

寺村(1982:135)では、補助動詞構文については、『何々シテ』の後につづけて、補助動詞として使われることがある。もののやりもらいでなく、行為のやりもらいであって、受益

の感じが伴う」と述べられており、補助動詞構文における行為の方向性は本動詞の方向性を引き継いでいると言える。『日本語学大辞典』（日本語学会編 2018:916）では、「恩恵の授受を表す補助動詞」の中で、「～てやる」について「話者あるいは話者側の人間が主語になり（中略）話者が恩恵的動作を施す側となる」と説明されている。また、「てやる」と「てあげる」の待遇差について触れたものとして、日本語記述文法研究会編（2009:121）で恩恵的事態標示に関係する補助動詞構文として「てあげる」が、その下向き待遇として「てやる」があげられている。

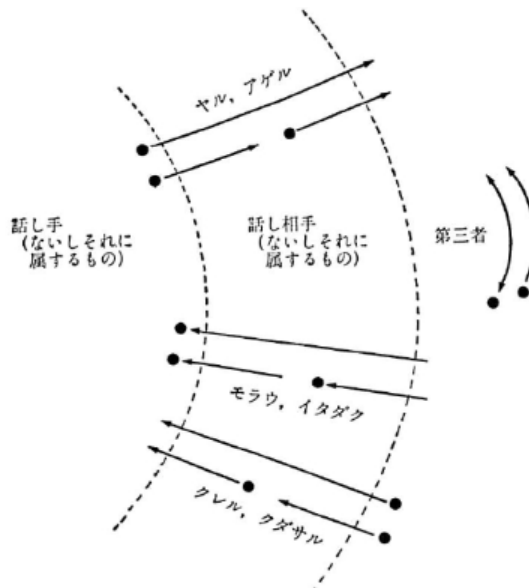


図 1 授受動詞の方向性（寺村 1982, p.134）³⁾

授受補助動詞の意味について詳しく述べたものとして、豊田（1974）がある。中でも遠心的授与「てやる」については、受給関係を表す（それによって相手に利益や不利益が生じる）もの、動作が話し手から相手に向かって行われることを表すもの、話し手の意志を表すものなどの意味で使われているとしている。

久野（1978）では、授受動詞について「共感度」という用語を用いて記述している。共感度に関する、久野の説明を挙げる。

「文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合い、即ち共感度を $E(x)$ で表す。共感度は、値 0（客観描写）から値 1（完全な自己同一視化）迄の連続体である」

（久野 1978：134）

久野（前掲）は、補助動詞「テヤル」の視点制約を共感度で表すと「 $E(\text{主語}) > E(\text{非主語})$ 」、すなわち話し手は主語寄りの視点しか取ることができないと述べている。また、「発話当事者の視点ハイアラーキー」⁴⁾も存在し、「*太郎が僕ニ自転車ヲ貸シテヤッタ」のよう

3) 図の中の「ないしそれに属するもの」とは、家族などの「自分の側にあるもの、“内側”のもの」と意識するものを指すと述べられている。

4) 「話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとること

に一人称が非主語を取る文は成立しないとしている。

授受表現について語用論的視点から述べたものとして、橋元（2001）がある。日本語において授受表現を用いて恩恵を施されたり施したりすることを言明することは、恩恵の受け手が与え手に義理感情を抱くことを言明することになり、授受表現を使用しない場合に比べてより配慮的であるとしている。

「(～て)やる」と「(～て)あげる」の使用状況を取り上げたものに、文化庁（2021）「国語に関する世論調査」がある。下の表1は、「うちの子におもちゃを{買ってやりたい／買ってあげたい}」という文において「てやる」と「てあげる」のどちらを使うかという質問に対する年度別の回答結果（％）である。表2は同じく文化庁（2021）の調査で、「てやる」と「てあげる」のどちらを使うかという質問の結果を地域別に見たものである。

表1から、全体的な傾向として、遠心的授与を表す補助動詞構文に「てやる」より「てあげる」を選ぶ人が年々増えており、本来謙譲語だった「てあげる」が美化語として好んで使われるようになっていくことが分かる。一方表2からは、筆者の出身地である大阪を含む近畿地方では、四国地方、中国地方の次に「てやる」を選ぶ人が多いことが分かる。

表1 「てやる」と「てあげる」のどちらを使うか（年度別）⁵⁾

調査年度	回答総数	「てやる」	「てあげる」	無回答	どちらも使う	分からない
令和2年度	3,794	34.5	64.2	1.3		
平成27年度*	1,959	35.6	57.0		7.1	0.3
平成17年度*	2,107	42.8	49.5		6.5	1.3
平成12年度*	2,192	46.8	44.8		7.4	1.0
平成7年度*	2,212	58.5	35.8		4.3	1.3

文化庁（2021：35）参照、数値は百分率（％）

表2 「てやる」と「てあげる」のどちらを使うか（地域別）

地域	回答総数	「てやる」	「てあげる」	無回答
北海道	161	32.3	67.1	0.6
東北	253	30.0	68.8	1.2
関東	1,330	27.4	71.4	1.2
北陸	154	39.0	61.0	—
中部	538	35.7	62.8	1.5
近畿	633	40.3	57.8	1.9
中国	213	46.9	50.2	2.8
四国	127	48.8	50.4	0.8
九州	385	38.7	60.5	0.8

文化庁（2021：119）参照、数値は百分率（％）

ができない」（久野 1978：146）という制約。

- 5) 平成期の調査結果(*)は面接聴取法によるもの。令和2年度調査(郵送法)とは調査方法が異なるため、参考値として示している。表中の斜線の項目は、該当年度の調査では尋ねていない・選択肢がないなど、値が存在しないもの。(文化庁 2021)

2.2. 方言形式「タル」について

授受補助動詞構文の「てやる」が縮約形「タル」となる地域が分かる資料として、日高（2007）は夏目漱石『坊ちゃん』の各地方言訳から授受表現を使うことができる部分を抜粋して対照している。「テヤル」が「タル」の形で現れた地方は、愛知県、富山県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県であった。本稿で対象とする大阪方言だけでなく、近隣諸方言にも「タル」が分布していることが分かる。

方言形式の「タル」についての先行研究として、村中（2020）が挙げられる。村中（前掲）では、「罵り表現」のひとつとして「テヤル」の使われ方を幕末期の上方語の戯作資料を用いて調査している。「タル」という形も含む「テヤル」には、「①同等以下の人などのために何かをする意を表す」と「②強い意志を持って、相手に悪い影響の及ぶ行為をする意を表す」の2つの意味があり、②の意味で使われる場合罵りと解釈できるとしている。分析の結果、戯作資料では「テヤル」は性別を問わず広い年齢層の人物が使っており、「強い罵り、強い忌々しさを表す」（p.109）とされている。

2.3. 授受表現と待遇の関係について

日高（2007）や日本語記述文法研究会編（2009）などでは、標準語の「てやる」は「てあげる」の下向き待遇であるとされている。

近世・近代の授受補助動詞の使用の東西差に注目した森（2018）では、江戸・東京に比べて上方・関西では「～てあげる」「～てさしあげる」などの与益表現が上位者に対しても多く使用されており、また受益表現「～させてもらう」の使用もより定着していることが述べられている。これらの相手に利益をもたらす形式や自分が利益を受ける形式を用いることについて、「聞き手に対して親しみを示す効果を生み、待遇表現が豊かな上方、関西方言内では維持された」と述べられている。

また、大阪方言における待遇形式を扱った研究として、酒井・野間（2018）による大阪府八尾市方言「ヤル」⁶⁾の機能についての記述がある。一般的な敬語が「遠隔化」の働きがあるのに対して、「ヤル」には、話し手、聞き手、話題の人物が＜ウチ＞の関係であることを表現する機能があると述べている。

2.4. 文法化について

現代日本語の文法化についての先行研究は、三宅（2005）、大堀（2005）、青木（2019）などがある。これらの研究で、文法化がどのような現象かという基準はおおよそ以下のようにまとめられる。

6) 大阪方言において「テヤル」という形式が現れるとき、「タル」を縮約せずに「テヤル」と言う場合と、＜ウチ＞を表す八尾市方言「ヤル」が動詞のテ形に後接する場合とがある（このとき「タル」と縮約されず、常に「てヤル」の形で現れる）。前者のアクセントは無核である（3節で述べる）が、後者は「ヤル」の直前にアクセントがあるので、これら2つの「テヤル」はアクセントによって区別されていると言える。

(i) いま 何 [して]ヤンの？

（酒井・野間 2018、括弧（囲んだ部分を高く発音する）は筆者による）

- A) 意味の抽象化／漂白
- B) 脱範疇化／機能語化
- C) 使用範囲の拡大・拡張
- D) 語形の縮約

青木 (2019) では、補助動詞「～ている」を例に文法化について説明されている。「～ている」では、本動詞「いる」の「存在」という具体的な意味は抽象化し (A)、アスペクトを表す機能的な語に変化して (B)、それに伴い使用範囲も拡大している (C)。D はすべての文法化した形式に当てはまる訳ではないが、「～ている」が「～てる」に、「～てしまう」が「～ちまう、～ちやう」に縮約されるといった現象が見られることがあると述べられている。

日本語の補助動詞については、三宅 (2005) や青木 (2019) で文法化の対象として取り上げられている。また、益岡 (1992) では、補助動詞「テイク」「テクル」について、本動詞から抽象的な意味に派生していく際に、「空間的方向性→時間的方向性／心理的方向性」という方向に変化していったと述べられている。

2.5. 問題のありか

標準語における授受表現についての先行研究は多くあるが、個別の方言における授受表現について記述した先行研究は少ない。筆者の内省では、標準語において動作の遠心的授受を意味する「てやる」と大阪方言の「タル」では待遇的条件や意味用法に異なる点がある。そこで本稿は、大阪方言における「タル」の意味用法・待遇の意味を記述することを目的とする。また、派生的な用法である「マイナスの影響」、「評価・実行」の用法は標準語「てやる」にもあるが、先行研究では現象の指摘にとどまっており、これらの用法と元の遠心的授受の用法のつながりについて述べた先行研究は見当たらなかったため、この意味用法についても記述を試みる。最後に、従来は「テヤル」の謙譲語とされていたが近年美化語として使用範囲を広げてきている「テアゲル」と比較しつつ、「タル」がどのような意味的領域に分布しているのか考察し、文法化との関連性も指摘する。

3. 「タル」の形態統語的特徴

まず、「タル」そのものの形態について整理する。「タル」は「動詞のテ形＋補助動詞ヤル」という補助動詞構文が、tejaru>t(ej)aru>taru と音韻的に縮約を起こした形態であると考えられる⁷⁾。「タル」は補助動詞構文に由来するものであるが、『日本語学大辞典』(日本語学会編 2018: 916) で補助動詞は「動詞の連用形に付加される『て』以降の部分を用いられる」と述べられているように、補助動詞に該当するのは「ヤル」の部分だけであるため、テ形由来の要素「t(ej)aru」を含んでいる「タル」そのものは補助動詞ではない。本稿では、「タル」をひとまとまりの補助動詞構文由来の授受表現として扱う。

「タル」のアクセントは無核であり、低起式の動詞に付くときは末尾が高くなる。例文 (6)

7) テ形にすると「テ」が有声化して「デ」になる動詞に付くときは、dejaru>d(ej)aru>daru となるので、「タル」ではなく「ダル」と発音される。
(ii) 子供に絵本読んダル。

は高起式の動詞（「貸す」）、例文（7）は低起式の動詞（「読む」）に接続する例である⁸⁾。

（6）教科書忘れたんやったら[貸しタル]で。

（7）子供に絵本読んだ[ル]。

動詞との接続については、動詞の連用形に「タル」が後接する。「タル」自体の活用は表3の通りである。表3は大阪府方言の活用体系をまとめた野間（2014）を参考に作成した。

表3 「タル」の活用表

終止類	断定非過去	断定過去	命令	禁止	意志	推量
	タル	タッタ	タレ タリ(一)	タルナ タリナ	タロ(一)	タルヤロ(一)
接続類	連体非過去	連体過去	中止	仮定		
	タル	タッタ	タッテ	タッタラ		
派生類	否定	丁寧	使役	受け身	可能肯定	可能否定
	タラン タラヘン タレヘン	(#)タリマス	??タラセル ??タラス	(*)タラレル	??タレル	??タラレヘン
	尊敬 タリハル	親愛 タリヤル	軽卑 タリヨル	継続 タッテル タットル	希望 タリタイ	のだ タルンヤ タルノヤ タルネン タンネン

活用の例をいくつか以下に挙げる。

（8）今からコンビニ行くから、ついでに買ってきタルわ。【断定非過去】

（9）犬を散歩に連れて行っタッタ。【断定過去】

（10）やめタレ！【命令】

（11）そんなこと言っタリなや。【禁止】

（12）教科書忘れたん？貸しタロか？【意志】

（13）そんなん言うんやったら手伝っ {タラン／タラヘン／タレヘン}。【否定】

（14）代われるもんやったら代わっタリたいわ。【希望】

基本的には大阪方言におけるラ行五段動詞と同じように活用するが、使役、受け身、可能肯定、可能否定といった助動詞が後接することで意味が複雑になるタイプのものは不自然に感じられる。

（15）??うちの子がおもちゃを独り占めしてたから、他の子に譲っタラせた。【使役】

（16）??国語は教えタレるけど、数学は教えタラれへん。【可能肯定】【可能否定】

特に受け身は、「タル」の主な意味である遠心的授与の意味が干渉するため、「タル」自体を受け身にした「～タラれる」は非文になる（例文（17））。動詞の受け身に「タル」を後接させた「～られタル」にすると文脈次第では使用可能になる。「タル」は主に遠心的授与、すなわち話し手側から働きかけることを意味するので、「行為の受け身を話し手側から行う」

8) []で囲んだ部分を高く発音する。

という特殊な文脈が必要になると考えられる（例文（18））。

（17）＊相談に乗っタラれてる。（→乗ってもらってる） 【タル＋受け身】

（18）一緒に怒られタルから、明日謝りに行こう。 【受け身＋タル】

丁寧体との共起については、聞き手が恩恵の受け手であるときは待遇的に使用しにくい。第三者を待遇するときや、恩恵性を持たない用法で使用するときは、聞き手と方言で会話する関係であれば使用可能だと思われる（待遇については5節で詳しく述べる）。

（19）＃お荷物持っタります。 【受け手：聞き手】

（20）家族の分のお弁当作っタってるんですよ。 【受け手：第三者（家族）】

（21）ピカピカに掃除しタりますよ。 【恩恵性のない用法】

また、大阪方言では他の授受表現「(テ)アゲル」「(テ)クレル」「(テ)モラウ」も本動詞・補助動詞の両方で使用されており、同じ遠心的授与を表す補助動詞構文「テアゲル」と「タル」は交代可能な場合もある（6.2.2節で詳しく述べる）。本稿では適宜「テアゲル」などと比較しつつ、「タル」を中心に取り上げる。

4. 意味用法

ここからは、大阪方言における「タル」が表す意味用法を、恩恵の授受の方向性という観点から記述する。なお、「タル」は運用上、恩恵の与え手と受け手の親疎関係など待遇的条件が使用可否に関わってくるが、これについては5節で検討する。以下に例文をあげていく上で、大阪方言における「タル」は、標準語の「てやる」のように特別ぞんざいな言い方であると受け取られることはなく、ニュートラルな言い方であることを断っておく。本節であげる例文は、待遇的条件を満たしているという前提で作例している。また、以下の作例の前に付している<○○が××に>というラベルは行為の恩恵性が誰から誰に受け渡されるかを示すものとし、発話は聞き手に対して行われることを想定している。

4.1. 恩恵性を持つ用法

まず、本動詞「やる」に最も意味が近い補助動詞の用法である、行為の恩恵性が人物の間で受け渡される用法について確認する。「行為の恩恵性が受け渡される」とは、ある行為についてそれを行う人物（＝恩恵性の与え手）とそれによって恩恵を感じる人物（＝受け手）が存在し、恩恵性が与え手から受け手に渡ったことが、「タル」によって表現されるということである。

4.1.1. 遠心的授与

「タル」の基本的な意味は、行為が遠心的授与の性質を持ち、その行為によって受け手が恩恵を受けることを表すものである。遠心的とは、2.1節であげた図1のように「話し手」を中心とし、「聞き手」「話題の人物」の順で外側に配置したものを想定したとき、内側から外側に向かって行為が行われることを指す。したがって、遠心的な行為は「話し手から聞き手」「話し手から話題の人物」「聞き手から話題の人物」「話題の人物から別の話題の人物」という4つのパターンにおいて行われる。それぞれの作例を以下に示す。

<話し手が聞き手に>

(22) 今からコンビニ行くから、ついでに買ってきタルわ。

(23) 荷物持っといタロか？ (持っていてあげようか？)

<話し手が話題の人物に>

(24) 近所のおばあさんの話し相手になっタル。

(25) 友達の課題を手伝っタッてた。

<聞き手が話題の人物に>

(26) ちょっと後ろの人通しタリー。 (通してあげて。)

(27) そんなこと言っタリなや。 (そんなこと言わないであげてよ。)

<話題の人物が別の話題の人物に>

(28) 田中さんはお子さんを保育園に送っタッてから会社に来る。

(29) お隣の兄弟は仲が良くて、よくお兄ちゃんが弟と遊んダッてるのを見かける。

以上の例文で「タル」は、話し手に近い方から遠い方に向かって行為が行われるときに用いられ、行為の影響を受ける人物が行為によって恩恵を受けることを表現している。ただし、<話題の人物から別の話題の人物に>については、与え手と受け手のどちらが話し手に近いかという判断が他の場合と比べて曖昧になるため、遠心的恩恵性の授受というよりは親から子など、上下関係の上から下に行われる際に使いやすくなると思われる。

4.1.2. 求心的授与

以上の用法は、標準語の「てあげる」と同様に遠心的授与の意味で用いられるものであるが、大阪方言には「タル」が求心的授与を表す用法も存在する。大阪方言では話し手が聞き手に何らかの行為を依頼するとき、すなわち想定される恩恵の与え手が聞き手、受け手が話し手になるような場合でも、「タル」を用いることができる。

<聞き手が話し手に>

(30) [私を] 許しタッて一や。 (許してよ。)

(31) [私に] そんなこと言わんといタッて。 (言わないで。)

(32) [私に] そんなこと言っタラんとして。 (言わないで。) ((31)と同じ)

(33) [私を] ちょっと手伝っタッて。 (手伝って。)

(34) [私と] これからも仲良くしタッてな。 (仲良くしてね。)

(35) [私のために] ちょっとそこどいタッて。 (どいて。)

標準語では、このような表現に「てあげる」を用いることはできないと思われる。

(36) [私を] *許してあげてよ。

(37) [私に] *そんなこと言わないであげて。

(38) [私を] *ちょっと手伝ってあげて。

(39) [私と] *これからも仲良くしてあげてね。

(40) [私のために] *ちょっとそこどいてあげて。

この点は、大阪方言の「タル」にあって標準語の「てやる」や「てあげる」にない、大阪方言に特有の用法だと考えられる。大阪方言においても、これらの「タル」を「テアゲル」

に置き換えることはできず、「タル」だけが持っている用法である。

(41) [私を] ??許しテアゲてーや。

また、本動詞「ヤル」を求心的な意味で用いることはできないため、求心的意味は補助動詞の用法に限って存在する用法であると言える。

(42) [私に] *一口ヤッてや。 (一口ちょうだい)

求心的な行為の中でも「タル」が使える条件は語形や人称、場面などの面で限られる。まず、語形については、テ形を用いた依頼の文で使われることがほとんどである。「タル」そのものの命令形「タレ」や、「～してクレへん？」などの行為要求文では、求心的用法の「タル」は使用しにくい。

(43) [私を] ??許しタレや。

(44) [私を] ??許しタッテクレへん？

使用頻度はかなり低いが、大阪方言では話し手が怒っているときなどに「～せんかい」(否定+疑問)の形で行為要求することがあり、この言い方で「～タらんかい」という形を取ることはできる。

(45) [私を] ちょっと待ッタらんかい！ (ちょっと待て)

人称的な制限として、求心的な行為であっても聞き手から話し手に行われるもの以外ときは、標準語と同じく求心的恩恵性を表す「テクレル」を使い、「タル」は使えない。

<話題の人物が話し手に>

(46) 友達が私にお金貸し {*タッた／テクレた}。

<話題の人物が聞き手に>

(47) 親が[あなたに] ご飯作ッ {*タッてん／テクレてん} の？

次に、聞き手から話し手に行為が行われるという条件を満たしていても、発話行為的に依頼ではないものには「テクレル」を使い、「タル」は使えない。

<聞き手が話し手に(依頼ではない)>

(48) 昨日は奢ッ {*タッて／テクレて} ありがとう。

(49) 私の分も買ッ {*タルん／テクレるん} ？

最後に場面的な制限として、(51)のような依頼される側の負担が重い場面では不適切となる。この用法が使えるのは、話し手が「聞き手は依頼を受け入れるものだ」と思っているときに限られると考えられる。

(50) [ちょっとした言い間違いを指摘されて] そのくらい[私を] 許しタッてーや。

(51) [友達の卒論のデータを消してしまって] ??ごめん！[私を] 許しタッて。

この求心的用法は、「タル」そのものが求心的な意味を持っていると言うより、遠心的授与の意味を意図的に違反して求心的な行為(の依頼)を表すのにも使用していると考えられる。なぜこのような本来の意味から逸れた用法が使用できるのかについては、6.1.1節で考察する。

4.2. 恩恵性を持たない用法

行為の恩恵性や方向性を持たない「タル」の用法もある。まず、以下のような文では、「タ

ル」が付く行為によって（恩恵ではなく）マイナスの影響を受ける人物がいることを表す。

(52) 理不尽なこと言ってくる先輩に言い返しタッタ。 【マイナスの影響】

(53) 意地悪したらあかんねんで一。先生に言ッタロー。 【マイナスの影響】

(54) [スポーツ観戦中に] もう一点取ッタレ！ 【マイナスの影響】

マイナスの影響とは、豊田（1974）で「マイナスの利益」、日高（2007）で「不利益の供与」と言われており、恩恵性と正反対の非恩恵性を与えることを表現する際に、皮肉的に恩恵を表す形式を用いるものである。恩恵性を持つ用法では基本的に二格の人物が恩恵の受け手であるのに対し、例えば例文（53）では「タル」の影響を受けるのは二格で標示されている「先生」ではなく「意地悪したことを先生に言われる」人物である。例文（54）の場合は二格が現れないが、話し手が応援しているチームが「もう一点取る」ことで相手チームがマイナスの影響を受けることが、「タル」によって表現される。このことから、マイナスの影響を意味する「タル」は、「タル」を含む文全体によって非恩恵を被る存在が想定されているときに使用できると考えられる。この用法では「タル」がないと不自然に感じられる。

(55) ??理不尽なこと言ってくる先輩に言い返した。

(56) 意地悪したらあかんねんで一。??先生に言お一。

(57) ??もう一点取れ！

他にも、恩恵性も行為の受け手も存在せず、ある事態に対する話し手の評価および話し手の事態を実行するという意志を表明するときに使う「タル」の用法もある。本稿では「評価・実行」の用法と呼ぶ。

(58) 仮病で休んだロかな。 【評価・実行】

(59) 絶対に今日中にレポート終わらせタル。 【評価・実行】

この用法では例文（60）（61）のように「タル」を用いなくても問題はない。

(60) 仮病で休もうかな。

(61) 絶対に今日中にレポート終わらせる。

この「タル」の意味は、補助動詞構文「テシマウ」の意味について述べた近藤（2022）で「評価表示用法」と呼ばれている用法が表す意味と類似している。近藤（2022）では、「テシマウ」には「動作主体が、前接動詞を主要部とする動詞句の表す動きを、終える」ことを意味する「終結点明示用法」と、「テ節が表す事態が望ましくない、または実現可能性が低いという話者の評価を表す」ことを意味する「評価表示用法」があるとしている。恩恵性も受け手も存在しないときに使われる「タル」も、「テシマウ」の評価表示用法が意味する「事態が望ましくない、または実現可能性が低いという話者の評価」を表現していると思われる。「タル」が「テシマウ」と違うのは、「テシマウ」が評価を表示するだけなのに対し、「タル」は「事態が望ましくない、または実現可能性が低いという評価を下したうえで、話し手がその事態を実現させる」といった話し手の意志も表現しているところにあると思われる。上の例文で言うと、例文（58）は「仮病で休む」ことが（一般的に）望ましくないという評価、例文（59）は「今日中にレポートを終わらせる」ことは実現可能性が低いという評価を下しつつ、そうと分かっているながら実行する意志を表明している。

また、以下の例文を比べると、「テシマウ」と「タル」の類似している部分と異なる部分

が説明できる。

(62) ダイエット中やのにお菓子を食べてシマッタ。 【評価表示用法】

(63) ダイエット中やけどお菓子を食ベタッタ。 【評価・実行】

これらの例文では、どちらも「ダイエット中にお菓子を食べる」ことに対して「望ましくない」という同じ評価を下してはいるが、「タル」を使用している例文(63)では、「望ましくないと分かっているが、自分の意志で実行した」ことまで表現されている。

この用法では意志形でなくても、過去の行為についての話し手の評価や意志を表すこともできる。以下の例文では、過去のある時点で話し手が事態について「望ましくない、または実現可能性が低い」と評価し、その上で事態を実行しようという意志があったことを表している。

(64) 今日は遊びたかったから、昨日のうちにレポート終わらせタッタ。【評価・実行】

(65) 仮病で休んだッたらよかったな。 【評価・実行】

恩恵の遠心的授与の用法や「マイナスの影響」の用法では、二格や文脈上で影響の受け手が存在しているのに対して、この「評価・実行」の用法では「タル」を用いる事象全体へのマイナスの評価を意味しているため、特定の人物を受け手に取ることはできない。むしろ受け手を明示すると、恩恵性のある意味にしか取れなくなる。

(66) ダイエット中やったけど、小食の友達の分も食ベタッタ。

【恩恵性の遠心的授与(受け手:友達)】

また、この用法では話し手の意志も表現しているため、聞き手や第三者の行為について述べる際には使用しにくくなる。

(67) ?? [聞き手が] 昨日でレポート終わらせタッタん?

(68) ??うちの子は絶対に志望校に合格シタル。

以上の「マイナスの影響」と「評価・実行」の用法は、「テアゲル」ではなく「タル」のみが持っている用法であり、「タル」が意味的に派生を起こしていると考えられる。この派生の流れについては6節で詳しく述べる。

5. 待遇的条件

ここでは、話し手、聞き手、話題の人物の関係に注目して、どのような関係であれば待遇的に「タル」を使用できるのかを整理する。

大阪方言における「タル」は、標準語の「てやる」ほど明確に下向き待遇であるという意識はないと筆者の内省では感じられるが、待遇的に誰に対してでも使用できるというわけではない。人物同士の関係として、本稿では親疎関係を指標とする。上下関係でなく親疎関係を採用したのは、「タル」の運用において現実に基づく社会的な上下関係よりも、話し手が主観的に親しいと感じるかどうかが、基準として適切だと考えたためである。明確に目上だと感じるような人は、親しくないため馴れ馴れしく接することを避けるという意味で親疎関係の「疎」に含まれると考える。また、「タル」が待遇する人物は恩恵の受け手である(例えば「子供に絵本読んダル」では「子供」を待遇している)と考えられるため、本節で検討する親疎関係は、主に与え手と受け手の間の関係のことを考える。

5.1. 聞き手待遇

まず、「タル」で表現される恩恵的な行為が、話し手から聞き手に向かって直接行われる場面（聞き手待遇場面）において、「タル」が使用可能な条件を確認する。

話し手が聞き手に向かって行う行為について「タル」が使えるのは、聞き手と親しい関係であるときに限られる。例文（70）のように、疎の聞き手に対して「タル」を使うのは待遇的に不適切に感じられる。

＜話し手が聞き手に＞

(69) [友人に向かって] 今からコンビニ行くから、ついでに買ってきタルわ。

【受け手：親】

(70) [電車で知らないおばあさんに向かって] #お席代わったりしましょうか？

【受け手：疎】

「タル」を用いて聞き手を直接待遇する際は、恩恵の受け手である聞き手と親しい関係である（と話し手が考えている）ことが条件となると言える。

5.2. 第三者待遇

ここでは、恩恵の受け手が話題の人物であるときについて、使用できる条件を確認する。

まず前提として、話し相手である聞き手が話し手と疎のとき、「タル」は使用しにくい。このことは、「タル」は大阪方言の中でも比較的方言色が強い形式であると感じられるため、「タル」に限らずそのような方言らしさが強い方言形式の使用は親しくない相手との会話において抵抗があるからだと考えられる。

＜話し手から話題の人物に＞

(71) [初対面の人に向かって] ??昨日、弟に勉強教えタツたんですよ。

【聞き手：疎、受け手：親】

＜聞き手が話題の人物に＞

(72) [初対面の人に向かって] ??お友達にも教えタツてくださいね。

【聞き手：疎、受け手：（与え手と）親】

(73) [通りすがりの人に]

??向こうに倒れてる人がいるので、救急車呼んダツてくれませんか？

【聞き手：疎、受け手：（与え手と）疎】

＜話題の人物が別の話題の人物に＞

(74) [ほとんど話したことのない上司に]

??道で倒れてる人がいて、通りかかった人が救急車呼んダツてたのを見ました。

【聞き手：疎、受け手：（与え手と）疎】

話し手と聞き手が疎のときは、恩恵の受け手が話し手や与え手と親しいかどうかは考慮に入らず、「タル」の使用は基本的に全て不自然となる。

5.2.1. 受け手のみ話題の人物

ここでは、恩恵の与え手が話し手または聞き手、受け手が話題の人物のとき、すなわち与

え手は会話の場にいるが受け手は会話の場にはいない場合を考える。

前節で述べたように、話し手が聞き手と方言で会話するような親しい関係であることは前提となる。その上で恩恵の与え手が恩恵の受け手と親しい関係（だと話し手が考えている）のとき、「タル」が使用できる。恩恵の受け手が恩恵の与え手と疎のとき、「タル」は待遇的に不適切になる。

<話し手が話題の人物に>

(75) 昨日、弟に勉強教えタッてん。 【受け手：親】

(76) #この前通りすがりの人に道教えタッてん。 【受け手：疎】

<聞き手が話題の人物に>

(77) 弟さんに勉強教えタッたりするん？ 【受け手：（与え手と）親】

(78) [電車で] #さっき乗ってきたおばあさん座りたそうにしてるし、席代わっタッたら？ 【受け手：（与え手と）疎】

恩恵の受け手が会話の場にはいないとき、恩恵の与え手と受け手が親しいことが「タル」の使用条件となる。恩恵の与え手が聞き手のときは、実際に聞き手と恩恵の受け手の関係を話し手が正確に把握していなくても、話し手が聞き手と恩恵の受け手が親しい関係であると考えていれば「タル」を使用できると考えられる。

また、本来的には使用が制限される場合でも、その人物が会話の場にはいない（話題の人物である）場合、わざと馴れ馴れしさや恩着せがましさを表現する意図で「タル」を使用することもある。

(79) [友人との会話で]

教授が機械の使い方全然分かってなかったから、教えタッてん。

基本的な「タル」が使える条件は、話し手と恩恵の受け手が親しいということになるが、この条件を前提として、実際には受け手と親しくなくても「『タル』を使っているので受け手とは親しい」ということを意味することもできると考えられる。

5.2.2. 与え手も受け手も話題の人物

ここでは、「タル」が表す行為が話題の人物同士で行われる場合、すなわち恩恵の与え手も受け手も会話の場にはいない場合を考える。

恩恵の与え手と受け手について、それぞれ話し手と親しいかどうかで分けて考える。先に例文を挙げる。△のマークは、使用可能だが「テアゲル」と比べると恩恵性を強調しているニュアンスを感じることを示す（6.2.2節で詳しく述べる）。

<話題の人物が別の話題の人物に>

(80) お隣の兄弟は仲が良くて、よくお兄ちゃんが弟と遊んだッてるのを見かける。

【与え手：親、受け手：親】

(81) 私の友達が道に迷ったとき、通りすがりの人が助け {*タッて／テクレて} んて。

【与え手：疎、受け手：親】

(82) 私の友達が、道に迷ってる人がおったから助け {△タッて／テアゲて} んて。

【与え手：親、受け手：疎】

- (83) 道で倒れてる人がおって、通りかかった人が救急車呼ん {△ダッて／デアゲて} たのを見た。 【与え手：疎、受け手：疎】

話題の人物同士の行為を言うとき、「タル」が問題なく使えるのは恩恵の与え手、受け手の両方が話し手と親しいときである（例文 (80)）。恩恵の与え手が話し手と疎、受け手が親のときは、「タル」は非文となり、「テクレル」を使用する（例文 (81)）。これは、話し手にとって恩恵の与え手との親しさと受け手との親しさに明確に差がある場合、親しい方を話し手に近い側、疎の方を話し手から遠い側に相対的に位置付けるため、与え手が疎の方であれば行為は求心的と捉えられるからだと考えられる。

与え手とも受け手とも親しい場合でも、片方が話し手の家族のときなど、話し手からの心理的距離に違いがあるときは、家族などの近い方を相対的に親、遠い方を相対的に疎と位置付ける。以下の例文 (84) では、与え手の「友達」が話し手と親であっても、受け手の「妹」の方が家族という話し手により近い人物であるために、「タル」は使えず求心的授与の「テクレル」が使われる。逆に与え手の方が話し手に近い (85) では、相対的に親→疎の遠心的授与と捉えられるので「タル」の方が自然である。「テクレル」も使用できるが、使用した場合その行為によって話し手が恩恵を感じていることを表現することになる。

- (84) 友達がうちの妹の面倒を {＊見タッた／見テクレた}。

- (85) うちの妹が近所の小学生の面倒を {見タッた／見テクレた}。

話し手が与え手、疎の話題の人物が受け手のときは「タル」を使えなかった（例文 (70)）のに対して、例文 (82) は、話し手と親しい（＝話し手側の）人物が与え手、疎の話題の人物が受け手という似た構造ではあるが、「タル」を使用しても問題ないと思われる。これは、親しいかどうかは話し手にとってではなく、話し手と相対的に近い方である恩恵の与え手にとっての問題であり、話し手にとって判断がつきにくくなるためだと思われる。同じ理由で、例文 (83) のように与え手も受け手も話し手にとって疎のときは、どちらかが話し手側であるという意識を持ちにくいいため、「タル」は使っても使わなくてもよいということになると考えられる。ただしこの場合、「タル」を使うと与え手の態度が恩着せがましいように聞こえたり、与え手と受け手の関係が親しいと言うことをわざわざ明言しているようなニュアンスが感じられたりする（実際に両者が親子や兄弟ならそのほうが自然だと思われる）ため、より一般的な無標の形式は「デアゲル」の方であると考えられる。

5.3. 待遇的条件のまとめ

ここまで、「タル」が使える条件について、話し手・聞き手・話題の人物の親疎関係を基準に述べてきた。条件を整理すると、以下のようになる。

- I. 話し手と聞き手は親しい関係である。親しくない聞き手に対して、方言形式自体の使用が制限される。
- II. a. 恩恵の与え手が話し手のとき、受け手と親しい関係である（と話し手が考えている）場合、使用可能である。
- b. 恩恵の与え手が話し手以外のとき、恩恵の与え手と受け手が親しい関係である（と話し手が考えている）場合、使用可能である。与え手と受け手の両方が話し

手にとって疎の人物のときなど、両者の関係を話し手が推し量るのが難しくなるほど、「タル」ではなく「テアゲル」が使われやすくなる。

与え手と受け手が親しい関係であれば、「タル」を使用してもぞんざいでも上から目線でもなく、むしろ親しい関係の間の行為については「タル」を使用しない（代わりに「テアゲル」を使用する）ほうが距離を感じてしまう場合もあるため、「タル」は大阪方言において広く使用されていると考えられる。

6. 考察

ここでは、「タル」の特徴について、他の形式との比較などを行いつつ考察する。6.1 節では「タル」の意味的な拡張関係について考察する。6.2 節では大阪方言の「タル」と標準語の「てやる」「てあげる」の違いや、恩恵の授受に関わる人称による「タル」と「テアゲル」の使いやすさの違いについて述べる。最後に 6.3 節で文法化との関連について述べる。

6.1. 「タル」の意味的拡張

ここでは、4 節で述べた 3 つの意味用法（遠心的授与、求心的授与、恩恵性のない用法）について、それぞれの意味用法の特徴を詳しく記述し、またそれぞれの意味用法がどのように関連して拡張していったのかを考察する。

6.1.1. 求心的用法についての考察

まず、4.1.2 節で述べた求心的授与の「タル」の用法について、久野（1978）の「共感度」の概念を用いて説明する。求心的授与の用法とは以下のようなものである。

(86) [私を] 許しタッてーや。(許してよ) (例文 (30) 再掲)

大阪方言の「タル」の求心的用法は、話し手が聞き手に対して、話し手に恩恵性のある行為を依頼するときに用いるものであり、「テアゲル」ではなく、「タル」だけが持っている用法である。また、本動詞「ヤル」にもなく、補助動詞由来の「タル」だけが持っている用法でもある。

久野（1978）では、標準語で「テヤル」を求心的授与の意味で使うと非文になるのは、「テヤルの視点制約：E（主語）>E（非主語）」と「発話当事者の視点ハイアラキー：共感度 E（一人称）>E（二・三人称）」の 2 つの原則で矛盾が生じるためであるとしている。大阪方言の求心的授与の「タル」は、聞き手に依頼するときに限って使用できるので、依頼されて行為を行うのは聞き手ということになり、視点制約における主語（動作主）は聞き手、恩恵の受け手である非主語は話し手となる。この用法における視点制約と発話当事者のハイアラキーとの間では、例文（87）のように矛盾が生じる。

(87) テヤルの視点制約：E（主語＝聞き手）>E（非主語＝話し手）

発話当事者のハイアラキー：E（一人称＝話し手）>E（二人称＝聞き手）

大阪方言の求心的な「タル」でも、普通はこの 2 つの原則は矛盾していると考えられる。しかし、例えば「[話し手のことを] 許しタッてーや」と聞き手に依頼したとき、話し手は視点制約における主語（＝聞き手）に感情移入し、聞き手の視点から話し手への恩恵性を捉

えているのだと捉えることができる。本来的には「発話当事者のハイアラキー」があるため、一人称より二・三人称に共感することは不自然となるが、それに意図的に違反して、話し手（一人称）も聞き手（二人称）側の立場であるかのように振る舞っているのだと考えられる。つまり、話し手は一時的に以下のような共感度を取っていることになる。

(88) E（聞き手）>E（話し手）

これによってテヤルの視点制約（E（主語）>E（非主語））と矛盾しなくなる。以上の操作を行った上で、「[話し手を] 許しタッてーや」という発話がなされると考えられる。「発話当事者のハイアラキー」という強い原則への違反が意図的に（ことば遊びや冗談として）行われるため、聞き手への依頼はある程度負担が軽いものに限られる（例文（50）（51））。

このような操作をわざわざ行う動機として、授受動詞の使用にまつわる語用論について述べた橋元（2001）の、遠心的授受表現の使用について述べた以下の原則が働いていると考えられる。

「互酬性に基づく親密さの原則：自分が施す恩恵を言明し、相手に義理感情を派生させることにより、絆の深さが確認され、関係の親密さがアピールできる」

（橋元 2001）

この原則は「てやる」「てあげる」などの遠心的授与についてのものなので、「自分」は恩恵の与え手、「相手」は恩恵の受け手と読み替えることができる。「許しタッてーや」の例では、話し手に向かう恩恵性を言明することで、受け手である話し手が義理感情を抱くことを意味し、話し手と聞き手の関係の親密さをアピールしているのではないかと考えられる。このようにして親密さをアピールすることで、「私とあなたの親密な関係があるんだから、この依頼は受け入れてくれるよね」というように、依頼の負担を軽減する語用論的效果が見込めると考えられる。5 節で述べたように、「タル」が恩恵の与え手と受け手が親しい関係であるときに使用できることも、親密さをアピールする効果を高めていると考えられる。

6.1.2. 恩恵性のない用法についての考察

次に、恩恵性のない用法について考察する。恩恵性のない用法には、「マイナスの影響」と「評価・実行」の2つの用法がある。

(89) 意地悪したらあかんねんで一。先生に言ッタロー。【マイナスの影響】

（例文（53）再掲）

(90) 仮病で休んだロかな。

【評価・実行】（例文（58）再掲）

「マイナスの影響」の用法は、恩恵性と正反対の非恩恵性を表現する際に、皮肉的に恩恵性を表す「タル」を使用していると考えられる。

さらに、「評価・実行」（事態が望ましくない、または実現可能性が低いという評価を下したうえで、話し手がその事態を実現させる）の用法は、「マイナスの影響」の用法から意味が拡張したものと考えられる。具体的な人物にマイナスの影響を与える意味から、影響の受け手の存在が抽象化して、特定の誰かにマイナスの影響を与えるわけではなくても、「ある事態に対して望ましくないことだと分かっている実行する」ということ自体のマイナスのイメージだけを伝達しているのだと考えられる。

6.1.3. 「タル」の意味的拡張のまとめ

以上の「タル」の意味の拡張関係を図にまとめると、図2のようになる。図2に示すとおり、実際に物の授受が行われることを意味する本動詞「ヤル」がもとになり、まず具体的な物の授受が抽象化して遠心的恩恵性の意味を残した補助動詞となる。話し手から聞き手への依頼の負担を減らす語用論的な方策として、求心的な用法も存在する。また、恩恵性を皮肉的に捉えればマイナスの影響を表現する用法となり、さらにマイナスの影響を受ける存在も抽象化して、事態に対してマイナスの評価をしつつ実行することを示すときにも使用できるようになる。

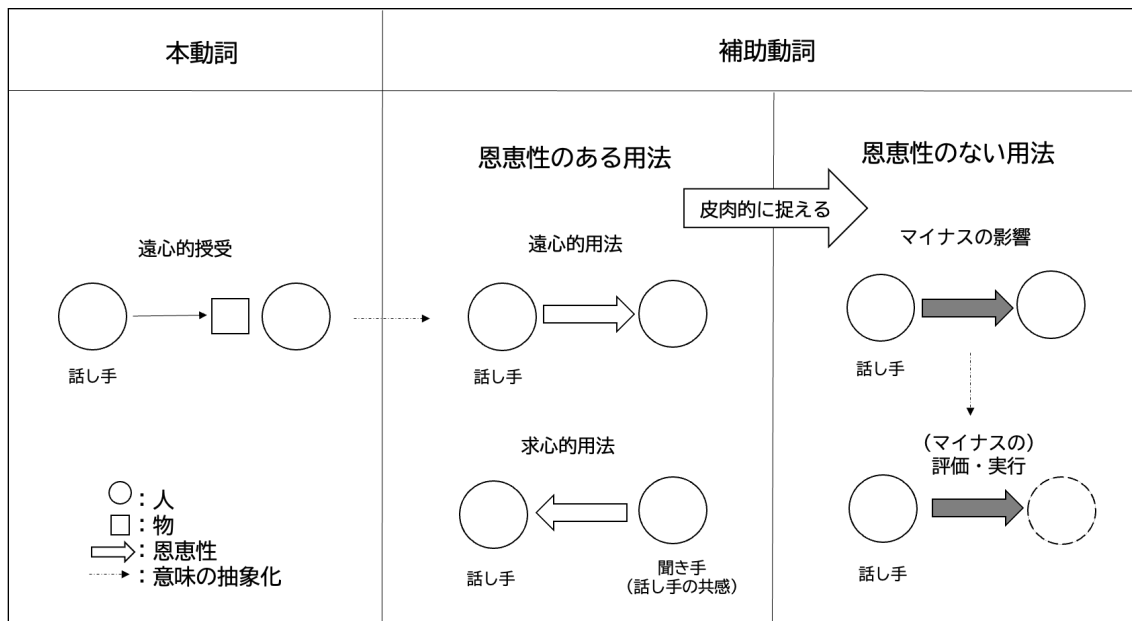


図2 「タル」の意味的拡張関係

「タル」の意味的拡張の流れは以上のように整理できる。遠心的用法以外の派生的な用法は、「テアゲル」と交代できない「タル」だけの意味であるので、「タル」は同じ遠心的授与を意味する「テアゲル」に先行して意味の拡張が進んでいると言える。

6.2. 類似形式との比較

ここでは標準語の「てやる」と大阪方言の「タル」の違いや、授受の人称による「タル」と「テアゲル」の違いについて比較しつつ述べる。

6.2.1. 標準語との違い

授受表現についての先行研究では、標準語「てやる」は話し手側からの遠心的授与の意味を持つとされる「てあげる」の下向き待遇として位置づけられていることが多い。下向き待遇であることによって、標準語において「てやる」を使用することは恩恵の与え手が受け手より上下関係の上の立場であることを明示的に意味することになるため、話し手自身また

は話し手側の人物を高く待遇するという社会的に避けるべき表現になりかねない。

(91) [(標準語で) 友人に向かって] ??荷物持っておいてやろうか？

しかし筆者の内省では、「タル」は、上下関係と言うより親疎関係の親しい関係同士であるということが条件であると考えられるため、上から目線やぞんざいさといった避けるべき意識に繋がりにくく、標準語の「てやる」と比べて使用されやすいのではないかと考えられる。

(92) [(大阪方言で) 友人に向かって] 荷物持っといタロか？

大阪方言の「タル」が標準語の「てやる」に比べて使われやすいというのが分かるのが、文化庁(2021)の調査結果である。2.1節でも述べたように、全国的な傾向としては年々「てあげる」の使用頻度が高くなっているが、大阪を含む関西地方では全国平均に比べ「てやる」の使用頻度が高いことが分かっている。「てあげる」ではなく「てやる(タル)」を選ぶ理由として、「てやる(タル)」に対して上から目線感などの抵抗感がないことや、「てやる(タル)」が表す「親しい関係」を積極的に表現したいという意識があることなどが考えられる。大阪方言においては<ウチ>や親愛を意味する「ヤル」(酒井・野間 2018、岸江 1998) など親しさを表現するための形式が用意されていることもあるので、「タル」も親しきの表現の一つとして使用されているとも考えられる。

なお、本動詞「ヤル」は、大阪方言においても「アゲル」の下向き待遇であると感じられる。補助動詞構文由来の「タル」は上下関係より親疎関係によって使用可否が決まるのに対して、本動詞「ヤル」は明確に下向き待遇の意味を持つため、待遇相手は動物や明確に目下の相手などに限られる。

(93) 飼い猫に餌を {ヤル／アゲル}。

(94) 友達に誕生日プレゼントを {#ヤル／アゲル}。

(95) (友達に向かって) 欲しかったら {#ヤル／アゲル} で。

(96) (友達に向かって) 欲しかったら買ってき {タル／△てアゲル} で。

もともと謙譲語だった「アゲル」が謙譲性を失い美化語として使用範囲を広げてきた影響で、従来はニュートラルな形式だった本動詞「ヤル」は相対的に待遇価が低いものだという意識が生じたと考えられる。一方、補助動詞に由来する「タル」は「テヤル」から縮約を起こし音が変化したため、本動詞「ヤル」とのつながりが意識されにくくなり、同時に本動詞「ヤル」の持つ下向き待遇の意味が意識されにくくなっていったのではないかと考えられる。その結果、現在は本動詞「ヤル」は下向き待遇、補助動詞由来の「タル」は待遇的にニュートラルと待遇的意味にズレが生じており、本動詞の用法では大阪方言においても美化語「アゲル」が選ばれやすいのではないと思われる。

6.2.2. 人称による違い

ここからは、恩恵の授受に関わる人称によって「タル」と「テアゲル」のどちらが自然に使えるかを見ていく。以下の例文は、主に5節(待遇的条件)で「タル」が使用できるとしたものを再掲している。5節で「タル」の使用が不適切または非文としたものは考察に含んでいない。△のマークは、その形式が使用可能ではあるが恩恵性を殊更に表現していると感じ

じられるものに付している。

<話し手が聞き手に>

(97) 今からコンビニ行くから、ついでに買ってき {タル／△テアゲル} わ。

(98) 荷物持っとい {タル／△テアゲル} で。

<話し手が話題の人物に>

(99) 昨日、弟に勉強教え {タッタ／テアゲた}。

<聞き手が話題の人物に>

(100) 隣のクラスの子に教科書貸し {タッて／テアゲて} や。

<話題の人物が別の話題の人物に>

(101) お隣の兄弟は仲が良くて、よくお兄ちゃんが弟と遊ん {ダッてる／デアゲてる} のを見かける。

(102) 私の友達が、道に迷ってる人がおったから助け {△タッて／テアゲて} んて。

(103) 道で倒れてる人がおって、通りかかった人が救急車呼ん {△ダッて／デアゲて} たのを見た。

話し手から直接聞き手に行為を行うときは、「タル」の方が自然であり、「テアゲル」を用いたときは殊更に恩恵性を表現している印象を受ける。例文(99)～(101)では、「タル」と「テアゲル」が完全に交代可能だと思われる。話題の人物と別の話題の人物の間で行為が行われる例文(102)(103)では、普通は「テアゲル」を使用し、「タル」にすると恩恵性を誇張した感じや、恩恵の与え手と受け手の親しさを暗に意味している感じが表現される。

以上のことを表にまとめたのが表4である。恩恵の与え手と受け手を話し手、聞き手、話題の人物で場合分けして、それぞれについて「タル」と「テアゲル」が使用できるところにそれぞれ記号を入れている。

表4 「タル」と「テアゲル」の人称による分布

受け手 与え手	話し手	聞き手	話題の人物 B
話し手		● (◇)	●◇
聞き手	● (依頼文のみ)		●◇
話題の人物 A	*	*	(●) ⁹⁾ ◇

凡例 ●：タル、◇：テアゲル、*：タルもテアゲルも不適格
括弧書きの記号は、使用できるが特別なニュアンスが感じられる形式である。

話し手や聞き手が恩恵の授受に関わるものは現場性が高く、恩恵の与え手・受け手が会話の場にいらないものは叙述性が高いと言われるが、表4は左上から現場性の高いもの、右下に行くほど叙述性が高いものという傾向になっている。現場性が高いもの(表4の左上のほう)ほど「タル」が使われやすく、叙述的なもの(表4の右下のほう)ほど「テアゲル」が使いやすくなる傾向があると考えられる。

特に話し手から聞き手への行為を言うときは、「テアゲル」を使うと恩恵性を強く表現し

9) 話題の人物 A と B が親しい関係であれば「タル」の使用は自然である。

ているように感じ、「タル」の方が自然に感じられる。これは、「タル」は「テヤル」から音韻的な縮約を経て補助動詞「ヤル」の形が完全に残っていないのに比べて、「テアゲル」が本動詞「アゲル」を完全に残したまま補助動詞として使われている¹⁰⁾ ため、恩恵性の授受の印象を強く受けることが関係すると考えられる。話し手から聞き手に直接恩恵が渡るような場合は、恩恵を受ける側である聞き手への心理的負担を感じさせることにもなってしまうため、「テアゲル」の使用が有標に感じられる。一方、橋元（2001）で述べられている「自分が施す恩恵を言明し、相手に義理感情を派生させることにより、絆の深さが確認され、関係の親密さがアピールできる」という原則により、恩恵性を言明するからこそ受け手の負担が少なくなるということもある。「テアゲル」ほど恩恵性の授受が明示的でなく、かつ上の原則に基づき親密さをアピールできる表現として「タル」が使用されやすいのではないかと思われる。

また、森（2018）で関西方言について「聞き手と距離を取るための表現も、聞き手と距離を近づける表現もともに維持して、適切な距離となるように調整している」と述べられているように、大阪方言も含む関西方言には、＜ウチ＞を表現する「ヤル」（酒井・野間 2018）などの親しさを表現する形式が存在するので、「タル」も恩恵の与え手と受け手の親しさを表現する形式の一つであると考えられる。話題の人物同士の行為など、恩恵の授受が話し手の関与しないところで行われるようなものになるにつれ受け手の心理的負担に対する配慮や親しさをアピールするが必要なくなるため、「テアゲル」を使うようになると考えられる。

6.2.3. 使用状況による違いのまとめ

ここまでの内容をまとめたものが表5である。

表5 「タル」と「テアゲル」の意味による分布

	本動詞	遠心的授与 (第三者待遇)	遠心的授与 (聞き手待遇)	求心的授与	恩恵性のない 用法
ヤル／タル	#	△	○	○	○
(テ) アゲル	○	○	△	×	×

凡例 ○：使用しやすい、△：比較的使用しにくい、#：目下にししか使用しない、×：使用しない

表から、授受の意味が具体的なもののほど美化語「アゲル」が使われやすく、抽象化した派生的な用法ほど「ヤル」に由来する「タル」が「テアゲル」に交代されないで使われ続けていると考えられる。この考察は現時点の大阪方言を使用している筆者によるものであるが、今後美化語「アゲル」を好む傾向が強くなると、求心的用法や恩恵性のない用法にも「アゲル」が入り込んでくる可能性もあると考えられる。

6.3. 文法化との関連

6.1 節では、「タル」の意味的拡張の流れを提示し、美化語の「テアゲル」は拡張された意

10) 筆者の内省では、大阪方言において「テアゲル」の縮約形「タゲル」は使用しにくい。

味までは進出していないことを述べた。ここからは、「タル」と「テアゲル」の意味的拡張の度合いの違いについて、共時的な文法化の度合いの違いという視点から考察する。

本動詞「ヤル」から補助動詞構文「テヤル／タル」への変化に伴って、具体的なものの授受の意味は抽象化し、ものを受け渡すことの恩恵性だけが補助動詞の用法に残っている。統語的にも、「*本を読んで、それからやった」などのように、テ形と「ヤル」の間に他の要素を入れることができず、またこの段階で「テヤル→タル」という音韻的な縮約も生じていることから、本動詞「ヤル」の自立語的な特徴が失われ文法化していることがわかる。一方、「テアゲル」は意味的には恩恵性だけを表すことができ、統語的な一体化も「タル」と同じぐらい進んでいるが、大阪方言においては音韻的に「タゲル」には変化していないと思われる。

求心的な用法および「マイナスの影響」が、「タル」だけにある用法であるのは、「タル」と「テアゲル」の歴史的な使用頻度の違いから生じた差であると思われる。従来謙譲語（＝敬語）だった「テアゲル」が好んで使用されるようになる以前は、「テヤル」に由来する「タル」の方がニュートラルな普通体の形式として広く使用されていたと推測される。従来の普通体の「タル」と敬語の「テアゲル」とを比べると、敬語という意味が付加されている「テアゲル」より、普通体で使用頻度も高い「タル」の方が本来の意味と違う文脈に派生しやすかったのではないかと考えられる。

また、「マイナスの影響」から「評価・実行」への変化は、具体的な相手にマイナスの影響を与える意味から、マイナスのイメージだけを残して、より抽象的な事態に対する話し手の主観的な評価や意志の意味に変化しており、益岡（1992）の「テイク」「テクル」の意味の派生と同じように、「空間的方向性」から「心理的方向性」を表すようになっていくことが分かる。

「タル」が形態・統語的に自立語としての特徴を失っており、さらに複数の段階において意味の抽象化が起こっていることから、「タル」の意味の拡張は文法化という現象のひとつであると考えられる。対して「テアゲル」は、従来は敬語という特殊な文脈で使われる語であり、「テヤル（タル）」よりも使用範囲が限定されていた歴史があるため、「マイナスの影響」などの方向に意味的に拡張するに至っていない。今後「テアゲル」の美化語化が進み、「タル」が大阪方言でもがぞんざいな語と認識されるようになれば、「テアゲル」が「タル」に起こった意味的拡張を遅れて辿っていく現象が見られる可能性があると考えられる。

6.4. 考察のまとめ

ここまで述べてきた「タル」の特徴についてまとめを行う。

6.1 節では、「タル」の意味的拡張の流れを整理した。遠心的授与の本動詞を中心に、遠心的授与の補助動詞用法、語用論的效果のために使用する求心的用法、恩恵性のない用法（マイナスの影響の用法、評価・実行の用法）がそれぞれ意味的に繋がりがあって拡張していると考えた。

使用範囲については、6.2.1 節で「タル」は標準語「てやる」のように上下関係に基づいて運用されるわけではなく、さらに標準語などと比べて大阪方言では聞き手との親しさを

表現するという意識が強いため、聞き手を直接待遇するときなど現場性の高いときほど「テヤル」に由来する「タル」が使用されやすいことを述べた。全国的に「テヤル」に代わって「テアゲル」が使用範囲を広げているが、大阪を含む関西地方では今でも「テヤル(タル)」が比較的多く使われていることも述べた。また、本動詞用法ではもともと謙譲語だった「アゲル」が浸透しており、「ヤル」は相対的に待遇価が低いものと感じられるが、「タル」は音韻的な縮約を受けたため待遇的にはニュートラルな意味を維持していると推測した。

最後に、もともと敬語であった「テアゲル」に比べて「タル」は意味の抽象化や拡張が進んでおり、使用範囲が広いものほど文法化が進みやすい可能性について述べた。

7. 全体のまとめと今後の課題

本稿では、大阪方言における授受表現「タル」の意味用法や待遇的条件を記述することを試みた。意味的には行為に遠心的な恩恵の意味を持たせる用法が基本であり、例外的に聞き手から話し手への行為要求文で聞き手の負担を減らす方策として求心的用法が存在すること、また派生的な用法として非恩恵性を表す用法や、事態へのマイナスの評価とそれを実行するという話し手の意志を表す用法もあることを述べた。待遇的には、恩恵の与え手と受け手が親しい関係であるときに使うことが多く、上から目線やぞんざいな意識で使用しているわけではないことを述べた。

考察の節では、求心的な用法について久野(1978)の「共感度」という概念を用いて説明し、「マイナスの影響」の用法から意味の抽象化を経て「評価・実行」の用法に派生したと考察した。「タル」と「テアゲル」の違いについては、用法ごとに見ると、授与の意味を残しているものほど「テアゲル」が使われやすく、抽象化が進んで授与の意味から離れたものほど「タル」が使われる傾向があり、派生的な意味を表すのはもともと敬語の「テアゲル」に比べて普通体だった「タル」が先行していると考察した。人称的には聞き手待遇のときは「タル」が、他の部分では「テアゲル」が美化語として使用しやすくなっていることを述べた。大阪方言では、聞き手との親しさを表現する意識があるため、聞き手待遇場面では親しい関係で用いる「タル」を使うことが多いと考えた。

今後の課題として、内省ではなく実際の談話などでどの程度「タル」が使われているか調査し、今回の記述の妥当性を確認する必要があると考える。文化庁(2021)の調査では、「てやる」の使用率が高い近畿地方においても、若い年代ほど「てあげる」を使用する割合が高くなっているため、現在の「タル」の使用の年代差や、今後大阪方言において「タル」が維持されるかどうかにも気になる点である。文法化についても触れたが、意味の抽象化については文法化に当てはまるが、「なぜ正反対の非恩恵性を表すのに恩恵性を表す形式を使うのか」などということまでは説明できなかったため、今後の課題として残っている。また、今回大阪方言の特徴として挙げた「タル」の求心的用法が、九州地方ではさらに広い文脈で使用可能である(日高 2007)との記述についてや、本稿で述べた派生的な用法が他地域でどの程度使用されているかなどについては筆者の内省では考察できないので、授受表現の方言による違いについての記述的研究の余地はまだ多く残されていると思われる。

【参考文献】

- 青木博史 (2019) 「補助動詞の文法化—『一方向性』をめぐる—」『日本語文法』19(2), pp.18-34, 日本語文法学会.
- 大堀壽夫 (2005) 「日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—」『日本語の研究』1(3), pp.1-17, 日本語学会.
- 岸江信介 (1998) 「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3, pp.23-46, 国立国語研究所.
- 久野暉 (1978) 「第2章 視点」『談話の文法』pp.129-282, 大修館書店.
- 近藤優美子 (2022) 「補助動詞“しまう”の用法と意味的構造」『阪大日本語研究』34, pp.47-64, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 酒井雅史・野間純平 (2018) 「大阪府八尾市方言の素材待遇形式ヤルの機能—三者の関係を表すマーカー—」『日本語の研究』14(1), pp.1-17, 日本語学会.
- 寺村秀夫 (1982) 「1.5.3 『ヤル、クレル、モラウ』類」『日本語のシンタクスと意味 第1巻』pp.133-135, くろしお出版.
- 豊田豊子 (1974) 「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1, pp.77-96, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- 日本語学会編 (2018) 『日本語学大辞典』東京堂出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 「補助動詞構文」『現代日本語文法 2 格と構文; ヴォイス』pp.121-142, くろしお出版.
- 野間純平 (2014) 「大阪府方言」『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』pp.102-111, 方言文法研究会.
- 橋元良明 (2001) 「授受表現の語用論」『言語』30(5), pp.46-51, 大修館書店.
- 日高水穂 (2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房.
- 文化庁 (2021) 「令和2年度 国語に関する世論調査 報告書」『国語に関する世論調査』
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/93710501_01.pdf 2023年1月3日最終閲覧.
- 益岡隆志 (1992) 「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向けて—」文化言語学編集委員会編『文化言語学 その提言と建設』pp.532-546, 三省堂.
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1(3), pp.61-76, 日本語学会.
- 村中淑子 (2020) 『関西方言における待遇表現の諸相』和泉書院.
- 森勇太 (2018) 「近世・近代における授受補助動詞表現の運用と東西差—申し出表現を中心に—」小林隆編『コミュニケーションの方言学』pp.365-386, ひつじ書房.

こうの ちひろ (大阪大学卒業生)